

『アフリカの人々と名付け』9

どこまでも個を指向する名前——

命名、エクリチュール、権力、歴史意識

小馬 徹

類へと発散するモシの庶民の名前

オートボルタの農耕民であるモシ人の個人名は、本人の名前に一種の父系的な苗字を添える二項命名法で表される。

赤ん坊は、(1)誕生した状況(時と所)、(2)誕生に先行する状況との関わり、あるいは、(3)肉体的特徴に因んで命名される。例えば、(1)「家の裏」、「穀物倉」、「収穫後の祖先祭」、「(イスラムの)金曜日」、(2)「女児」(女の子だけが育ち、男の子が死んだ後に生まれた男の子の擬装)、「再来」(死んだ子供の生まれかわりと見なされた)、「鶏」

(母親が懐妊中に誤って鶏の雛を踏み殺した場合；先に生まれた子供と同じ不幸な運命を辿らせないための擬装)、(3)「頭でっかち」、「大耳」、という具合である。

この他に、(4)例えば「奴隷」のように、赤ん坊を死の手から守ろうと擬装する名前もある。また、(5)王への讃仰、あるいは葛藤関係にある隣人に対する己の潔白の表明などをメッセージとする、「威勢のある王」とか「我々は神をけがさなかった」のような名前を与える場合もある[川田順造「モシ族の命名体系」『民族学研究』43(4), 1979]——なお、(4)に類する名付けが、広くアフリカ諸民族ばかりでなく日本の古代・中世にもみられる事、また(5)のような命名法が、やはり農耕民であるテンボ、ルグバラ、ニョロでも見られる事は既に見た通りである。

ただし、モシ人は、全く前例のない命名は原則として行わない。その結果、本来は個別

的であるはずの赤ん坊の出生状況も、類としての名に引き当てて命名する事になる点に、川田は注意を向けている。

更に、苗字は名前の指示機能を強めるために添えるのだが、系譜を深く辿る事ができないので十分な効果は得られない。そこで、個人を識別するべく「苗字」に幾つかの工夫がこらされる、庶民の名前は類としてア・プリオリである事を免れず、結局類の中へと発散して行かざるを得ない[川田、前掲書]。

個を指向するモシの「戦名」

これとは逆に、詩に似た「戦名」が個へと強く指向出来るのは、「ことばの意味作用をつよめることによって」である。つまり、意味作用を担う単位を増やして行きさえすれば、理論的には無限の数の個を指示し得るはずだ。こうして、「戦名」は文章のように長くなる。しかし、「戦名」も子孫に共有されて苗字化すれば指示される対象が個から類へと発散するから、その個的な指示作用も一代限りのものの、言い換えればせいぜい共時的なものでしかあり得ない[川田、前掲書]。

ところが、王(首長)が地位を継承する際に新たに名乗る複数の「戦名」、あるいは即位名は、新王とそれまでの王とを弁別するためのものだ。つまり王の「戦名」は、通時(歴史)的な参照系の中で、新任の王の個としての存在を指示している。だから、「ことばの意味作用をつよめる」ために益々長くなって、たとえば「雨が降ると、肥沃になっ

た土が盲人も癡者も喜ばせる」という箴言としての文、あるいは詩の章句に似たものになる。だから、ヨーロッパの王のように「××何世」と類的に命名される事はある得ない。

通常、王は一つの「戦名」の最初の一語に因んで、「雨王」のように呼ばれる。そして、即位前の名で彼を呼ぶ事も、苗字で呼ぶ事も固く禁じられている。つまり王は即位して唯一者となるので、類を示す一切の標識を必要としなくなるばかりではない。むしろそれらを意図的に遠ざけるのである——日本の天皇が姓を持たず、ヨーロッパの王も最近までは姓を持たなかった事を想起して欲しい。

エクリチュール 書を記す事の始原へ

しかし、モシの王は共時的には唯一者であっても、同じく唯一者であったモシの先代の王たちと、通時的には一つの類を形造る。つまり、歴代の王の命名は、権力と結合した通時的な参照系をなすのである。

しかも歴代のモシ王の名は、父系的に世襲される王宮お抱えの楽士たちの手で、太鼓の音に置き換えられる。こうして、王の名は、「幼時からのたえまない訓練によって、太鼓を両手の素手で打つ動作の肉体的記憶として、生きた人間に内装されたメッセージとなり、世代をこえて伝えられてゆく」のである〔川田、前掲書〕。

命名における通時態の発生を問題とする川田は、「唯一なるもの」を分類体系の中に位置づける事を「原エクリチュール」と読んだデリダを参照する。そして、デリダと同様に、必ずしも文字だけに依存しない広義の「書き記すこと」としてエクリチュールを捉え、トーキング・ドラムを用いるモシの「太鼓ことば」に「音のエクリチュール」とでも呼ぶべき属性を見い出す。つまり、こうして川田は、エクリチュールの始原を命名行為の中に

見ようとするのである〔川田、前掲書〕。

もちろんモシの庶民の二項命名法などにも通時（歴史）への指向性は見られるが、先に検討した通りその系譜深度は浅く、結局は共時的な類へと発散して行く。一方、モシの王統譜は30代以上を遡り、モシの人々が知っている過去の出来事を相互に整序する、固有の参照の指標としての系をなす。

権力と歴史意識の誕生

ここで、モシの王たちの即位名である「戦名」の幾つかを眺めておこう。

「豊かなみのりが屋敷をみだし、赤子もよろこんで笑い、老人もよろこんで笑う」。「雨がどんなに集まって降っても、象を洗うことはできない」〔川田、前掲書〕。「老獺なカメレオンは穴を跳び越えるが、象は落ちて骨を折るだろう」〔川田順造「肖像と固有名詞」『アジア・アフリカ言語文化研究』（東京外国語大学A A研）48・49, 1995〕。

これらの例からも窺えるように、モシ王の即位名となる「戦名」は箴言の形をとっているが、「その意味するものは王位継承争いにおける対抗者をはじめとする、顕在的、潜在的な敵対者、あるいは臣下に向けられたメッセージだ」と言える〔川田、前掲書〕。

そして、そのメッセージは王宮お抱えの楽士たちの手によって「太鼓ことば」に置き換えられ、世代を超えて伝えられると共に、折に触れて再現されては人々に流布される。

それゆえに、権力と結びついたこのような命名に起因するエクリチュールの発生は、単線的で非可逆的な歴史意識の発生にも不可分に繋がっているのだと、川田は言う（川田順造『無文字社会の歴史』, 1976）。

命名は存在の起源であり、支配であり、枠付けである。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）